

European Living in Japan

日本で活躍するヨーロッパ人

Great Expectations for the Future of Football
in Japan from a German Manager

「日本のサッカーの将来は大いに期待できる」と語るドイツ人監督

「サッカーのまち」埼玉県さいたま市をホームタウンとするサッカーチーム「浦和レッドダイヤモンズ（略称：浦和レッズ）」の監督を務めるギド・ブッフバルトは、元西ドイツ・ナショナルチームの鉄壁の守りを誇るディフェンダーであった。日本のプロサッカー「Jリーグ」の創成期に浦和レッズの選手として活躍するとともに、同時期に来日した他の外国人選手とともに、Jリーグの発展に大いに貢献した。また、その後は監督として、浦和レッズを上位チームに育てた。その率直な人柄は、選手のみならず、日本人サッカーファンの心もとらえている。

浦和レッズの練習場のクラブハウス内ロビーは、2日後に迫った昨年のJリーグの王者ガンバ大阪との試合に向け、チームの仕上がり具合を取材しようという記者であふれかえっていた。「練習中に選手が怪我をしたようだが、だいじょうぶか」、「心配はない」——。監督のそっけないドイツ語を、専属通訳者が次々と日本語に置きかえていく。

白いハーフパンツに青と黄色のTシャツ姿のブッフバルト監督は、背が高く、金髪の44歳。19歳と15歳の息子がいるが、実年齢よりかなり若々しく見える。ここのところ何キロか体重が増えたそうだが、見た目は健康そのもの。1990年のワールドカップ・イタリア大会決勝でアルゼンチンのマラドーナの執拗な攻めを封じ込め、一躍有名になったブッフバルト監督は、長年ドイツの専門サッカークラブVfBシュトゥットガルトの選手として活躍した。これまで大きな成功を収めてきた経歴から想像される人物像とは異なり、親しみやすく、地に足が着いた好人物である。

監督は日本語を話さないが、サッカー用語は英語から来ているものが多いので日々の仕事には困らない。それに、選手たちには監督のジェスチャーがよく通じるようだ。

日本好きは決して社交辞令ではない。「みんなとても親切で、何かと手を差し伸べてくれる」とありがたく思っている。唯一苦手なのが交通渋滞。息子が



2005年天皇杯大会の優勝カップを掲げるギド・ブッフバルト監督

©URAWAREDS

ドイツ人学校に通うのに便利な世田谷区の住まいから、毎日約2時間もかけて通勤している監督の言葉であるだけに納得がいく。

夢から現実に

監督は子供のころからサッカー選手を目指していたのだろうか。彼は昔を思い出しながら、目を輝かせて語る——わずか3歳のころ、兄たちのサッカーの人数合わせにいつも駆り出されていたこと、そのころから、いつか選手になりたいと夢みていたこと、そしてサッカーに興味のない父親の賛同を得られなかったこと——を。

そう、監督には常に闘志が備わっている。世界的名声を得るきっかけとなった

1990年のワールドカップ出場前、彼はアキレス腱の腫れと痛みで悩まされていた。いくつもの病院を訪ねたが、どの医者も原因は見つけれず、「君は健康体だ。痛みがあるのは分かるが、残念ながら何もしてあげられない」と言うだけだった。「なぜだ!」という言葉が口をついて出た。だが、何とか耐えきれないような痛みを乗り越えて臨んだワールドカップで、彼は大きな代償を得る。彼の完璧な守備があってこそ西ドイツは優勝の栄誉に輝くことができ、ブッフバルト監督自身もナショナルチームのベッケンバウアー監督からMVPIに選ばれたのだ。

成功を収めたブッフバルト監督はイタリアのバルマFCに移籍を望んだが、シュトゥットガルトは彼を手放したがらず、結局は1994年のワールドカップ



までドイツに残った。その後、33歳になった監督はついに祖国を離れる決心をし、浦和レッズの選手に、という話が来たときには飛びついた。「日本に」リーグが設立されて間もないころで、この国のサッカーの立ち上げにかかわるまたとない機会だと思った」。数年後、ドイツに戻って選手とその後マネージャーも努めたが、2004年には再び日本にカムバック、行き先はまたもや浦和レッズだった。

日本人はサッカーに向いているか

サッカー選手として成功するためにはもちろん、大いなる野心と強靱な意志が必要だ。身体能力やテクニックも当然ながら重要となる。とはいえ、ブッフバルト監督が強調するのは、サッカーが何よりも団体競技であるということであり、そのため、チーム精神が不可欠であるという点だ。

監督は、チーム精神の大切さを何度も口にする。それが同クラブの成功につながっているとも言える。彼はまた、各々の選手に対して何を期待しているのかをはっきり伝える。「指示を出すときは常に率直に、正直に説明するし、その理由についても一人ひとりの選手と話し合う。だから、相手を叱りつけなければならない場合も、それがなぜ必要なのか相手は分かってくれる」。

こういった率直で素直なコミュニケーションの取り方は、おそらく監督のドイツ人気質によるものだろう。だが、レッズの成績を見れば、それが十分に功を奏しているといえよう。何と言っても、昨年はJ1リーグでは2位、天皇杯全日本サッカー選手権大会では優勝を勝ち取り、さらに2月のガンバとの試合では、3対1でJ1の王者を下し、ベストチームとなった。

さて、日本と他国の選手の違いはどこにあるのだろうか。一般的に、英国の選手は攻撃的で、ドイツは荒々しく、イタリアは機知に富んでいる、と言われる。日本選手の特徴についてブッフバルト監督は意外な答えを返す。日本の選手はブラジルの選手に似ている、というのだ。「彼らはボールに対して愛情を抱いており、個人主義者だ。柔軟で、ボールの扱いも上手い。だが、少なくとも現時点ではまだ<ゴールハンター>とは呼べない。試合中、冷静さを保つのが苦手で、ボールをゴールから1メートルの距離までもっていくことができれば、それだけで大喜びしてしまう」。これは自分が世界のスーパースターに匹敵するような選手になるとは思えない、日本人の謙虚な性格のせいかもしれない。

試合中は個人主義者である日本人であるが、競技場を離れれば、チームメートは友情で結ばれており、一緒に遊びに行くこともある。監督は言う。「30人やそこの選手のうち、試合で自分の実力を示し、名を上げるチャンスがあるのはたったの11人。外国では選手間の競争は相当激しいが、日本の場合はそれが無い」。

サッカーの将来のために

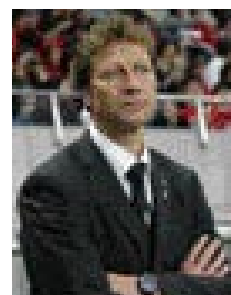
監督は、日本には数多くの有能な選手がおり、日本のサッカーはさらに発展する見込みがあるという。「日本選手の生来の才能とボールに対する愛情に、ゴールへの執着も加われば、将来は大いに期待できる」。1998年のワールドカップでフランス代表チームが急躍進したように、日本人選手の中から「スター」が生まれば、状況は好転するだろう。

6月にドイツで開かれるワールドカップ大会で日本はどのぐらいの成績を残せるか——。監督は「グループリーグの

通過は間違いない」と即答する。「オーストラリア戦とクロアチア戦はまずまずだろう。当然ながらブラジルになると話が違ってくるが、リーグ戦で2位以内に残れば、決勝トーナメントに進出できる。その先は、対戦相手次第でかなり運に左右されるだろう」。

多くの輝かしい業績を持つ監督だが、次の目標についても迷いが無い。レッズのJ1リーグ優勝である。監督は、これは問題なく達成可能だと考えている。「最強チームと言われるようになった現在、選手たちに襲いかかるプレッシャーをどう克服していくかが、今一番の課題だ」。

今後も日本で活躍を続け、ファンの期待に応えてくれるだろうか——。心配はいらない。まだしばらく日本を離れる予定はないという。今後は、必ずしもプロだけではなく、場合によっては次の世代の養成にも力を入れたいと考えている。「今はやりたいことを選んで、楽しみながらやれる立場だからね」。その通り、ブッフバルト監督にはぜひこれからも見事なサッカーを通じて、私たちを喜ばせてもらいたい。 



ギド・ブッフバルト
Guido Buchwald

浦和レッド
ダイヤモンド監督

©URAWAREDS

1961年ドイツ・ベルリン生まれ。1978年西ドイツ代表ユースに選出。83年にブンデスリーガ(プロサッカーリーグ)のVfBシュトゥットガルトに移り、リーグ優勝に貢献。90年のワールドカップに西ドイツ代表として出場し、優勝。94年、浦和レッドダイヤモンドに入団、ディフェンスの要として活躍。2002年から浦和レッズのテクニカル・アドバイザー、04年に監督に就任。